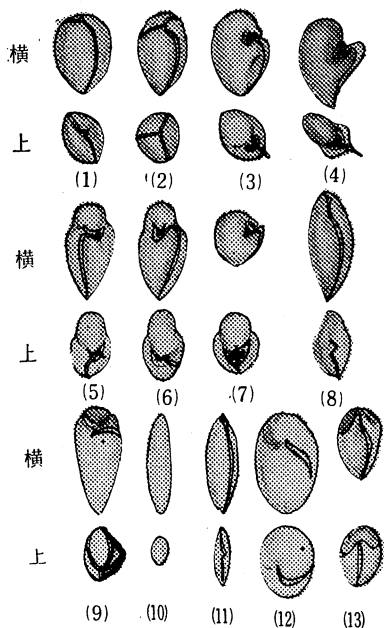


医王寺のラッパイチョウについて

湯 浅 浩 史

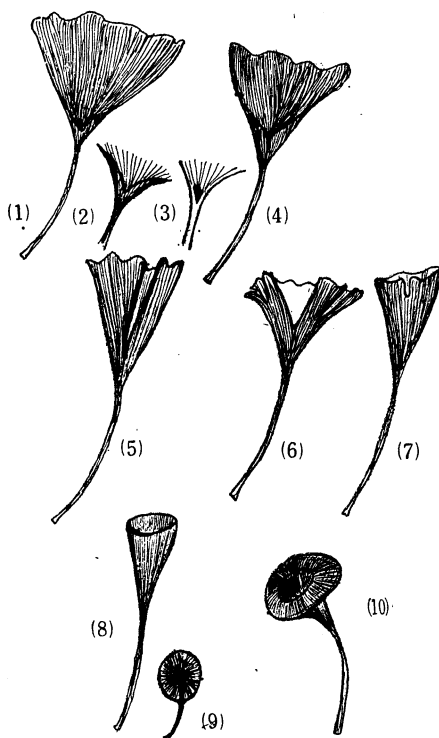
ラッパイチョウ (*Ginkgo biloba form tubifolia*) は葉脚が一部もしくは全部癒合して、漏斗葉 (Infundibular leaf) となつている珍しいイチョウの奇形である。1960年11月28日、偶然に立ち寄つた多紀郡丹南町北村の

禅宗東護山、医王寺で、友人の辻啓介君が変つたイチョウの葉が落ちている事に気づき、それから二人で調べたところ相当数の奇形葉を発見した。



1、2は正常銀杏
3～7の形の奇形銀杏が一番多い

(2)は(1)の葉柄のつけね付近の拡大 (3)は葉身と葉柄のつけねのところに凹みを生じた葉、葉脚は癒合していない。(4)～(7)は各種移行型 (8)は完全な漏斗葉 (9)は(8)を真下からみた図 (10)は朝顔型



その後11月29日、12月1日、12月3日に任意の一平方の区域を選び、その中の葉の奇形状態を調査したところ別表のような結果が得られた。大体一割強の高率をもつて奇形葉が現われている。そのうち完全な漏斗葉は2%位である。

この種の奇形はムレスズメヤサトウダイコンにもみられ、筆者はこの他ケンにおいても発見している。

このような奇形が出現するのは食虫植物のサラセニア等でみられる様に原始葉が未だ幼い内に葉の上下両面何れかの生長が促され凹みを作り、葉身に内腔を生じたまま成長するためからではないかと思われる。

大体葉の外側が漏斗葉の内側となつているが中には朝顔の花のような状態のものも一例だけ発見出来た。

漏斗葉を生ずるイチョウの木は高さ約20m目通り1.96

m、根まわり約5m、樹冠北8m西4.2m、南2m、東5mである。なお樹冠の南が極端に小さいのはイチョウと同じ位の杉の大木があるためであり、西の広がりやや小さいのは台風によつて隣りの木が倒れたため枝がおれたからである。

樹令ははつきりしないが小さいながら乳柱がすでに56本垂れていること、寺が室町中期にはすでに建てられていたこと、銀杏が3～4斗とれること、大きさなどからして相当古いものと思われる。

葉の奇形状態は種々移行し、葉身と葉柄のつけねがわずかに漏斗状に凹んでいるもの、あるいは単に小さな凹みだけで葉脚は全然癒着していないものから、完全に切れこみがなくなりどこが葉脚であつたかわからなくなつてしまつた様なものまでみられる。又葉に漏斗葉があら

ラ ッ パ イ ヨ チ ウ の 奇 形 状 態

月 日	葉の総数	奇形葉	完	半上	半下	奇形率	備 考
11・29	1216	133	34	50	49	10.9%	清 掃 後 四,五日,境外 11・29 清 掃 境内
12・1 A	235	20	4	16		0.85%	
12・1 B	210	21	6	15		10.0%	〃
12・1 C	122	13	2	11		10.7%	〃
12・3 A	1679	195	26	47	122	11.6%	〃
12・3 B	1326	185	30	61	94	14.0%	〃
	4788	567	102	465		11.8%	

(註) ここでいう完とは葉脚の全然わからなくなつたもの。半上とは葉脚が半分以下しか認められないもの。二つ切れこみがある場合長い方を葉脚とみなした。なお葉脚がほんの一部でも癒合していれば奇形とみなした。単なる凹みで葉脚の癒合していないものは正常葉の中にふくむ。

われる様に、銀杏においても一部にきまつた様な形で凹みを生ずるものが多数みられる。曲玉の少しくびれた様な形であるが、ちよつとみれば僧が衣のそでをあわせて挿んでいるようにも見える。そして左右の衣のそでの合せ目とみえるところだけに稜があらわれている。

この銀杏に凹みが出来る事と漏斗葉との間に何か関連

があるように思われる。

昨年は時期が遅すぎ、銀杏の奇形がどれくらいの割合で生じるか、残念ながら調べることが出来なかつた。然し相当数眼につき、葉にあらわれる奇形率位はありそうである。

寺は道路のすぐそばにあり、道路よりは1mほど小高くなつており境内の表面は常に乾燥している様である。然し寺の120mほど北を加古川の源流篠山川が流れているので、土中の深いところでは水分が豊富であると思われる。イチヨウにおける葉の変化は水分調達に原因あるといわれているから、このことが奇形に係しているのかもしれない。

なおこのイチヨウの木には極くわずかながら葉上に原基を有するものもみられ、近い将来にはオハツキ銀杏も出現することと思われる。

この木の二世もあるそうであるから遺伝的にこの性質が伝わっているかどうか、さし木して環境をかえても奇形葉があらわれるかどうか、あるいは顕微鏡的にその成因を研究したいと考えている。